

EPSON
EXCEED YOUR VISION

2010年度(2011年3月期) 第2四半期 決算説明会

2010年10月29日

セイコーエプソン株式会社

©SEIKO EPSON CORPORATION 2010. All rights reserved.

■ 将来見通しに係わる記述についての注意事項

本説明資料に記載されている将来の業績に関する見通しは、公表時点で入手可能な情報に基づく将来の予測であり、潜在的なリスクや不確定要素を含んだものです。

そのため、実際の業績はさまざまな要素により、記載された見通しと大きく異なる結果となり得ることをご承知おきください。実際の業績に影響を与える要素としては、日本および海外の経済情勢、市場におけるエプソンの新商品・新サービスの開発・提供とそれらに対する需要の動向、価格競争を含む他社との競合、テクノロジーの変化、為替の変動などが含まれます。

なお、業績等に影響を与える要素は、これらに限定されるものではありません。

■ 本説明資料における表示方法

数値： 表示単位未満を切り捨て

比率： 千円単位で計算後、表示単位の一桁下位を四捨五入

「マネジメントアプローチ」にもとづく、開示セグメントの変更について

(2010年度から)

- 「マネジメントアプローチ」の考え方に基づき、
2009年度まで各セグメントならびに各事業に売上高比率で配賦をしていた本社費用を
2010年度からは「全社セグメント」に集約
- 「その他の事業」セグメントで計上していた、グループ向けサービスを目的とした
子会社は機能を各事業に移管
- 2010年度予想の説明において、
前年度を比較対象とする場合は、2009年度のセグメント損益もあわせて補正

2

■ 開示セグメントの変更

- 2010年度から、会計基準の変更
「マネジメントアプローチ」によるセグメント情報の開示。
- 2010年度の実績および予想を、
前年度である2009年度と比較してご説明する際は、
2009年度のセグメントの損益についても同様の補正。

1. 概要

2. 詳細

決算ハイライト（中間決算）



(億円)	2009年度		2010年度				増減額 / 増減率	
	実績	%	7/30予想	%	実績	%	前期実績比	7/30予想比
売上高	4,496	-	4,890	-	4,792	-	+296 +6.6%	-97 -2.0%
営業利益	△93	-2.1%	120	2.5%	146	3.1%	+239 -	+26 +22.2%
経常利益	△144	-3.2%	140	2.9%	148	3.1%	+292 -	+8 +6.1%
税引前利益	△203	-4.5%	130	2.7%	134	2.8%	+338 -	+4 +3.3%
純利益	△291	-6.5%	80	1.6%	74	1.6%	+366 -	-5 -6.8%
EPS	△146.92 円		40.04 円		37.33 円			
換算 レート	USD	95.49 円		89.00 円		88.95 円		
	EUR	133.15 円		114.00 円		113.85 円		

前回予想 第2四半期以降の予想前提レート
USD: 85.00円、EUR: 110.00円

4

■決算ハイライト

- 上期は、売上高が前期比296億円増収の4,792億円、営業利益は239億円増益の146億円、純利益は366億円増益の74億円となり、大幅に損益を回復。
- 7月30日に発表した前回予想に対しては、売上高が若干未達となったが、営業利益は予想を上回った。
- 株主様への利益還元については、期初予想のとおり中間配当を1株あたり10円とさせていただきます。

2010年度業績予想



(億円)	2009年度		2010年度				増減額 / 増減率	
	実績	%	7/30予想	%	今回予想	%	前期実績比	前回予想比
売上高	9,853	-	10,130	-	10,000	-	+146 +1.5%	-130 -1.3%
営業利益	182	1.8%	270	2.7%	350	3.5%	+167 +92.0%	+80 +29.6%
経常利益	138	1.4%	240	2.4%	340	3.4%	+201 +145.0%	+100 +41.7%
税引前利益	△7	-0.1%	120	1.2%	220	2.2%	+227 -	+100 +83.3%
当期純利益	△197	-2.0%	0	0.0%	100	1.0%	+297 -	+100 -
EPS	△99.34 円		0.00 円		50.05 円			
換算 レート	USD	92.85 円	87.00 円		84.00 円		今回予想 2010年度下期の予想前提レート USD: 80.00円 EUR: 110.00円	
	EUR	131.15 円	112.00 円		112.00 円			

前回予想 第2四半期以降の予想前提レート
USD: 85.00円、EUR: 110.00円

5

■2010年度の業績予想

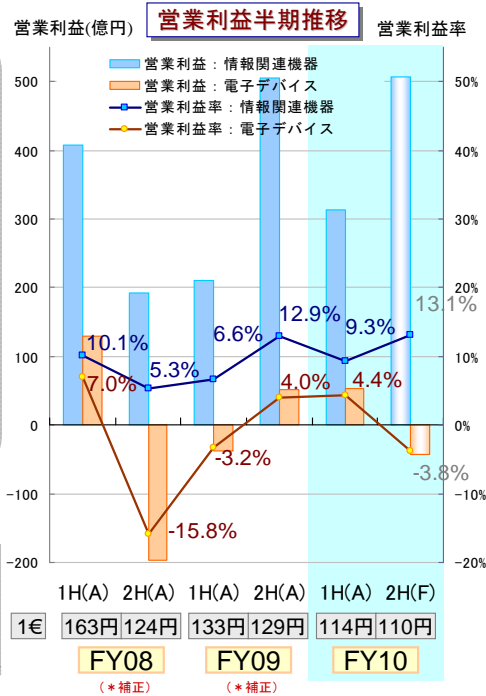
- 売上高は 1兆円と、前回予想を 130億円下回る見込みだが、営業利益は 350億円と、前回予想を 80億円上回る見込み。
- 今期の経営最大の目標として、当期純利益ブレイクイーン以上の達成を掲げてきたが、今回の予想では 100億円と、目標を達成できる見込み。
- 構造改革の総仕上げの年として必要な特別損失や、税金費用の前提に変更ない。
- 下期の為替前提は、USDドルは従来の85円から80円に変更、ユーロは引き続き110円。

2010年度 業績のポイント

EPSON
DESIGN YOUR VISION

- 上期はビジネス向け需要の回復、好調なデバイス需要、固定費削減、原価改善の効果などにより、為替の影響をカバーして計画比大幅改善
- 下期は為替・景気など先行き懸念はあるものの、新商品のタイムリーな市場投入や継続的な費用削減努力などにより、前回予想を上方修正
- 来期以降の新たな成長軌道確立に向けた仕込みを着実に実施

「当期純利益ブレークイーブン以上」の
期初目標達成が視野に！



6

■2010年度 業績のポイント

- 2010年度は、期初スタートにあたって、マクロ経済環境や、ユーロ安を中心とした為替の動向などに不透明感が強かったことから、できるだけ早い段階から黒字を積み上げようと、全社としてスタートダッシュに力を注いだ。
- その結果、上期は、リーマンショック以降の景気回復の流れを受け、ラージフォーマットプリンター、ビジネスシステム、プロジェクターなどのビジネス向け需要の回復や、半導体および水晶デバイスを中心とした電子デバイスの好調な需要を、しっかりと取り込めた。
- また、昨年度強力に推し進めた固定費削減に、今期も継続して取り組むとともに、原価改善の効果なども加えて、為替のマイナス影響をカバーし、期初の計画を大幅に上回る業績。
- 下期は、為替動向や、欧米を始めとする各地域の景気動向など、先行きに対する懸念は、依然として残る。
- そうした中、当社は最大の商戦期である第3四半期に向けて投入したプリンターやプロジェクターなどの主力商品は、滑り出し順調で確かな手ごたえ。
- また、上期に引き続き、費用の執行にあたっては慎重に対応しながら、原価改善にも取り組む。
- 以上の結果、「当期利益ブレークイーブン以上」という期初目標の達成が視野に。

情報関連機器セグメント

- ◆ IJP : ホーム、SOHO、エマージング各市場向けラインナップ
大幅拡充により本体数量の10%成長
- ◆ BS : 好調な中国徴税需要の継続獲得と先進国および
エマージング市場でのPOS需要の確実な取り込み
- ◆ PRJ: No.1ベンダーとしての豊富なラインナップにより
ビジネス、教育、ホーム各市場で競合に水をあける

電子デバイスセグメント

- ◆ QD : No.1供給能力の最大活用と変動費・固定費削減への
取り組み強化
- ◆ IC : 水晶・センサー事業、プリンター事業とのシナジー発揮、
EPDコントローラーなど強みを活かせる分野に集中
- ◆ HTPS : 外販需要の確実な取り込みと原価低減の推進

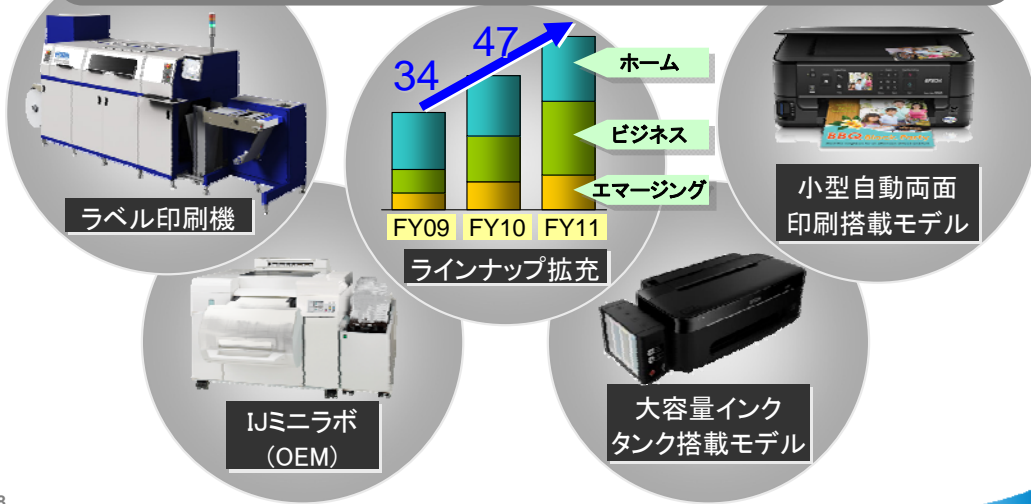
7

■ 今期の業績予想の達成に向けた 取り組み

- インクジェットプリンターは、各市場セグメントに向けたラインナップの大幅拡充により、本体数量を10%成長。
- ビジネスシステムは、引き続き 中国での徴税需要が好調に推移、SIDMでこれをしっかりと獲得するとともに、POSは先進国での高付加価値商品の展開や、エマージング諸国での需要拡大の流れを捉える。
- プロジェクターは、下期も北米を中心に教育向け需要が継続する見込み、ビジネス向けやホーム向けとあわせて、豊富なラインナップにより需要を獲得し、No.1ポジションをさらに拡大。
- 水晶デバイスは、携帯電話向け需要は引き続き堅調、デジタル家電、パソコン、ゲーム市場などで第4四半期での需要減少が見込む。No.1の供給能力を活かした受注活動の強化とあわせ、変動費・固定費削減への取り組む。
- 半導体も、同様に第4四半期での不透明感はあるものの、社内 各事業との一層のシナジー発揮に 取り組むとともに、電子ペーパー用コントローラーなど、エプソンの強みを最大に活かせる分野に集中し、利益貢献。
- 高温ポリシリコンTFTは、社内需要が好調に推移する反面、外部顧客向けの需要が、弱含み。総合的な原価低減などを進め、事業体質の強化に取り組む。

インクジェットプリンター事業

◆お客様セグメントに最適な商品を提供するための
ラインナップの拡充と、商業・産業領域の展開加速



8

■来期以降の新たな成長軌道確立に向けた取り組み

- インクジェットプリンター事業については、ホーム、ビジネス、エマージングなど、お客様ごとに最適な商品を提供していく方針に基づき、今期は、商品のラインナップを大幅に拡充。
- エマージング市場専用開発した大容量インクタンク搭載モデルや、SOHO のお客様向けの、小型自動両面印刷機能搭載モデルなどは、その一例。
- 商業・産業領域での展開も、加速。
- 今期は、ラベル印刷機の発売に加え、インクジェット ミニラボ機のOEM供給を開始するなど、着実に戦略が実行に移され、商品として結実。
- インクジェットプリンター事業は、将来にわたってもエプソンの支柱事業。
エプソンが持つ マイクロピエゾテクノロジーをさらに磨き上げ、既存のお客様だけでなく、あらゆるお客様に価値をお届けすることによって、新たな成長軌道を確認する。

プロジェクター事業

◆ No.1ポジションを支える新技術・強みを磨き、
お客様価値を高める豊富なラインナップの提供



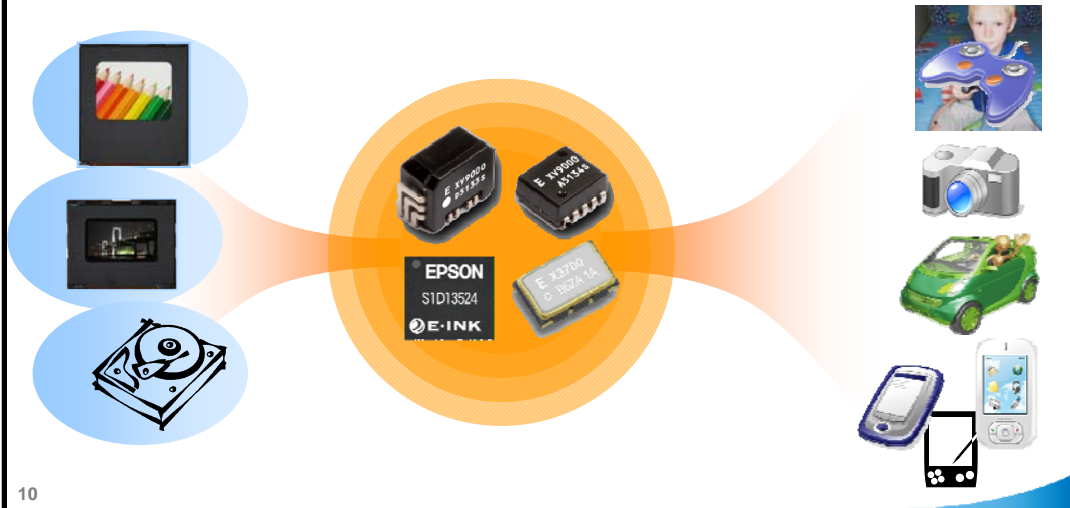
9

■ 来期以降の新たな成長軌道確立に向けた取り組み

- プロジェクター事業は、社内にコア技術を有する強みを活かし、No.1 ポジションならではの豊富な商品ラインナップの提供により、シェアを拡大する。
- 今期は、反射型高温ポリシリコンTFTという新しい技術が完成し、これまでとは桁違いの100万対1という高コントラストを実現、ホームシアター向け商品を投入。
- 従来から培ってきたHTPS、光学系、電源周り、回路設計、ランプなどエプソンが強みを持つ技術を結集させ、3LCD方式では世界で最も薄い44mmというビジネスバッグにも入る薄さの商品も投入。
- お客様価値を高める商品を提供することにより、今期25%程度と想定しているシェアを、一層拡大する。

水晶・センサー事業

◆ 半導体事業との強いシナジーを高め、
小型・高精度の分野で新しい価値を実現する



10

■ 来期以降の新たな成長軌道確立に向けた取り組み

- 水晶・センサー事業は、供給能力で競合他社に水をあげ、No.1メーカーとして勝ち抜きをはかるため、今期、生産拡大のための設備投資を再開。小型・高精度を可能とするエプソン独自のQMEMS技術を、従来の音叉型商品だけでなく、ATの分野に導入するための投資も含む。
- これにより、モバイル商品が世界的な広がりを見せる中で、ATの分野でも小型化・高精度化を先取りし、デファクト化することで、需要を獲得し、事業の成長を果たす。
- さらに、水晶・センサー事業と半導体事業との一層のシナジー発揮を具現化するために、10月から マイクロデバイス事業本部 を設置、未来社会になくてはならないマイクロシステムをお届けできるよう体制整備に着手。
- 「省・小・精」の技術は、クラウドの時代の到来とともに、モバイル機器が劇的な進化と拡大をとげるというメガトレンドに合致した技術。
- エプソンの水晶・センサーと半導体とが、より多くの 小型で 高精度な商品を提供するために、強いシナジーを発揮し新たなデバイスを作り出し、お客様に価値をご提供する。

中期経営計画(2009～2011年度)の2年次として、
「確実に利益が確保できる企業体質の定着」をめざす

- 当期純利益 ブレークイーブン以上をめざす
- 長期ビジョン「SE15」達成に向けた仕込みを着実に進める
- 事業構造改革の総仕上げ



【中期経営計画(2009～2011年度)】最終年次である2011年度に、
【長期ビジョン「SE15」実現に向けた新たな成長軌道を確立】する

■2010年度の位置づけ

- 2010年度は、中期経営計画の2年次として、確実に利益が確保できる企業体質の定着、を目指してきた。上期が終わった時点ではあるが、当期純利益でのブレークイーブン以上の達成は、視野に。
- 長期ビジョン SE15達成に向けた仕込みも、着実に進んでいる。
- 「事業構造改革の総仕上げの年」と位置づけて取り組んできた中・小型液晶ディスプレイ事業の残された課題についても、ここで方向性を明確にした。現在エプソンがオペレーションをしている鳥取の生産ラインについては、ソニー様からの受託生産を終了し、ラインを閉鎖する意思決定。クローズするラインに携わる従業員や、現在ソニー様に出向中の従業員の処遇については、年度内に、ソニー様への転籍、エプソングループ内での転換などにより対応を進める。
- これらの対応に必要な費用は、今期 特別損失として見込んでいる範囲で収まる。
- 2010年度の計画に対し、上期は着実な成果。下期以降も、長期ビジョン SE15実現に向けた、新たな成長軌道の確立に向け、全社一丸となって取り組む。

1. 概要

2. 詳細

1) 2010年度 第2四半期決算

2) 2010年度 業績予想

決算ハイライト（第2四半期決算）

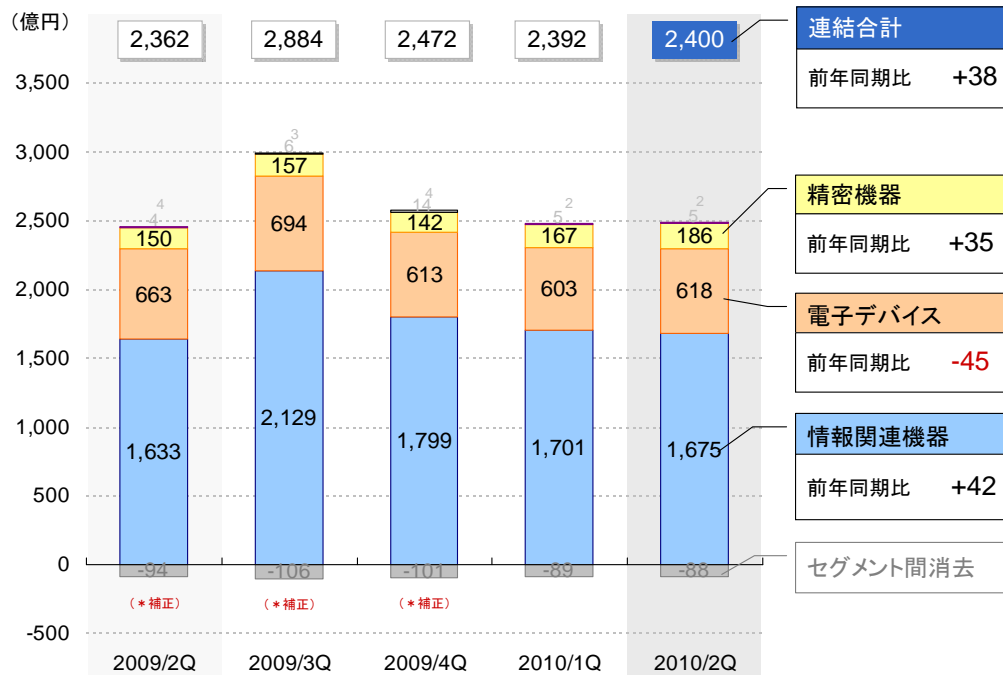


(億円)	2009年度		2010年度		増減	
	2Q実績	%	2Q実績	%	増減額	増減率
売上高	2,362	-	2,400	-	+38	+1.6%
営業利益	31	1.3%	39	1.6%	+7	+24.9%
経常利益	6	0.3%	36	1.5%	+30	+481.0%
税引前利益	△35	-1.5%	27	1.1%	+63	-
四半期純利益	△68	-2.9%	△4	-0.2%	+63	-
EPS	△34.14円		△2.43円			
換算 レート	USD	93.65円	85.90円			
	EUR	133.73円	110.70円			

14

■2010年度 第2四半期の決算ハイライト

四半期売上高推移 ▶ 事業セグメント別

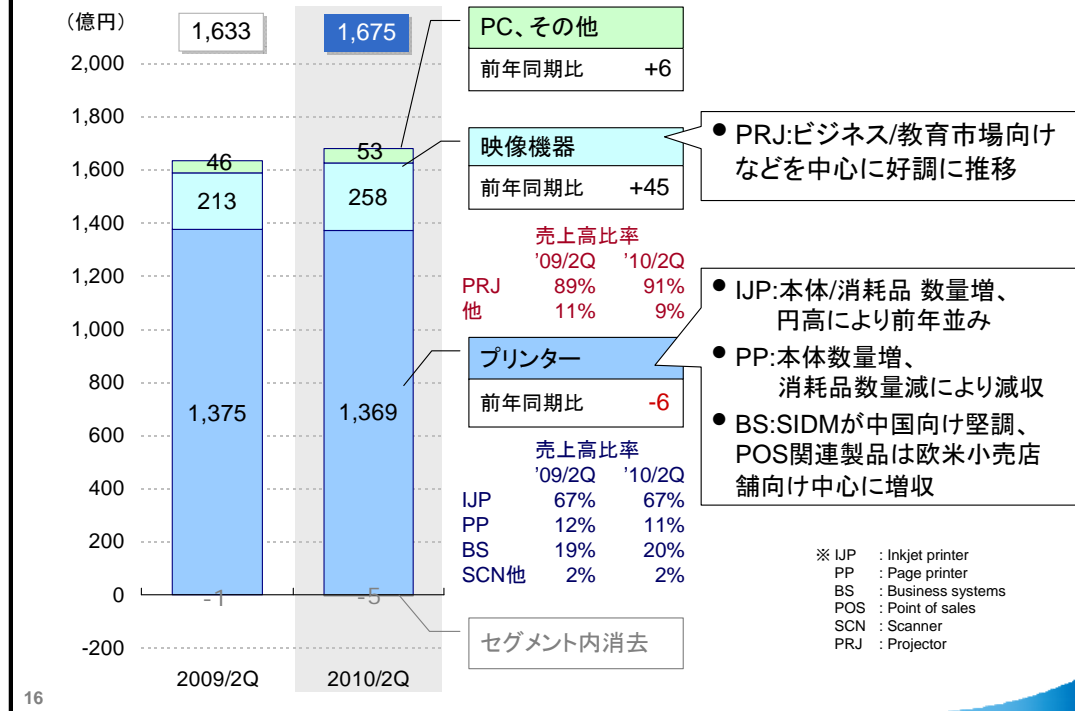


15

■ 事業別セグメント別の四半期売上高推移

- 情報関連機器は前年同期比 42億円の増収、電子デバイスは 45億円の減収、精密機器は 35億円の増収。

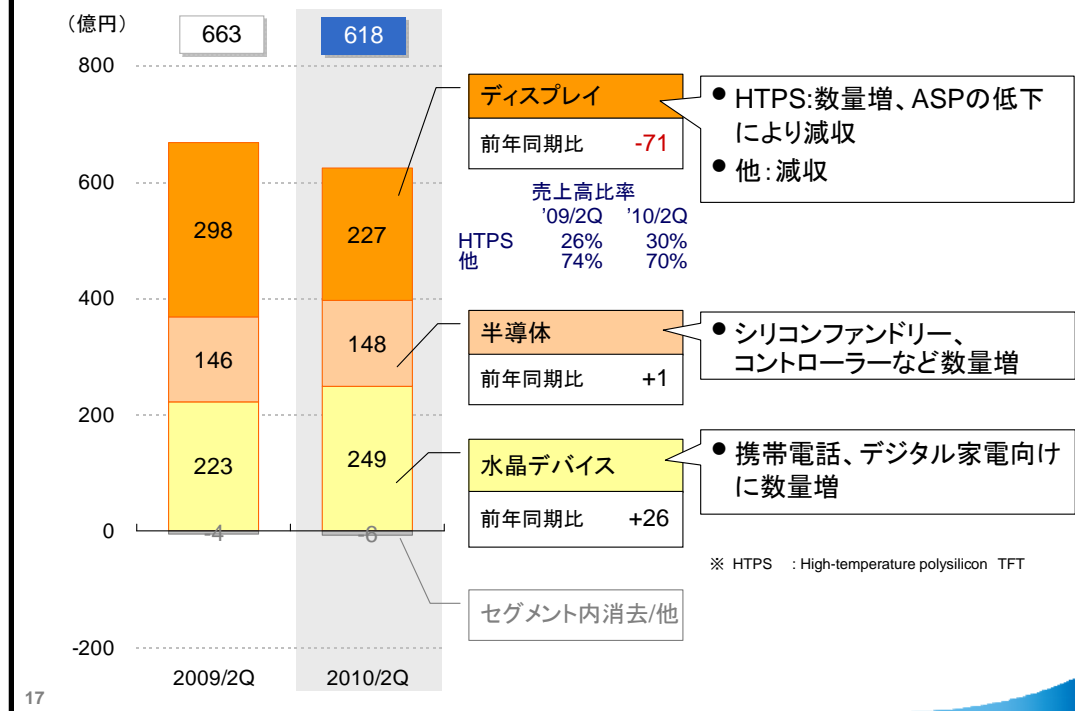
四半期売上高比較 ▶ 情報関連機器セグメント



■ 情報関連機器セグメントの第2四半期売上高

- プリンター事業は、ほぼ前年並みの1,369億円。インクジェットプリンターは、本体、消耗品ともに数量を伸ばしたが、円高による為替の影響により前年並み。
- 本体の地域別状況は、欧州は前年並み、アメリカ、日本、アジアの各地域において数量を伸ばした。
- ページプリンターは、入札案件などへの積極的な取り組みにより、欧州、アジアにおいて本体の数量を伸ばしたものの、消耗品の数量が減少、ならびに為替の影響により減収。
- ビジネスシステムは、SIDMが中国向けの徴税需要を中心に堅調だったこと、POS関連製品が欧米の小売店舗向けに販売数量が増加したことにより増収。
- 映像機器は、欧米、アジアを中心にビジネス向けならびに教育市場向けプロジェクターの販売が好調だったことにより前年同期比45億円の増収。
- 前回予想との比較について。
- インクジェットプリンターは、消耗品は予想を上回ったが、本体が欧米において数量が未達となったことにより予想を下回った。
- ビジネスシステムは、中国やアジアを中心にSIDM、POS関連製品が堅調だったことにより、ほぼ予想どおり。
- ページプリンターは、欧州での販売未達により予想を下回った。
- 映像機器は、欧州市場は堅調に推移したが、米州を中心に数量が未達となったことにより予想を下回った。
- セグメント全体では予想を下回った。

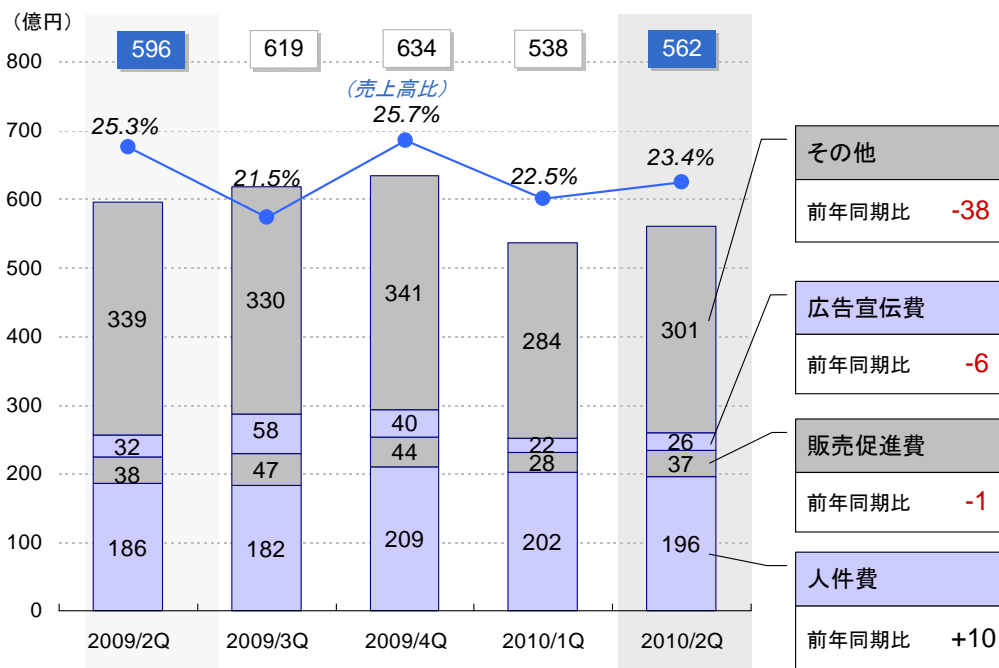
四半期売上高比較 ▶ 電子デバイスセグメント



■ 電子デバイス事業セグメントの 前年同期比較

- 水晶デバイスは、ASPの低下はあったものの、携帯電話、デジタル家電向けに数量が増加により26億円の増収。
- 半導体は、携帯電話向けLCDコントローラーの数量減少などがあったものの、シリコンファクトリーや電子ペーパー向けコントローラーの数量増加により前年並み。
- ディ스플레이事業は、前年同期比 71億円の減収。
構造改革を進めている中・小型液晶ディスプレイが減収となったことと、HTPSが、数量増となったものの ASP低下の影響により減収。
- 前回予想との比較について。
- 半導体、ディスプレイは ほぼ予想通りだったが、水晶デバイスは一部のアプリケーションを中心に数量未達により、予想を下回った。

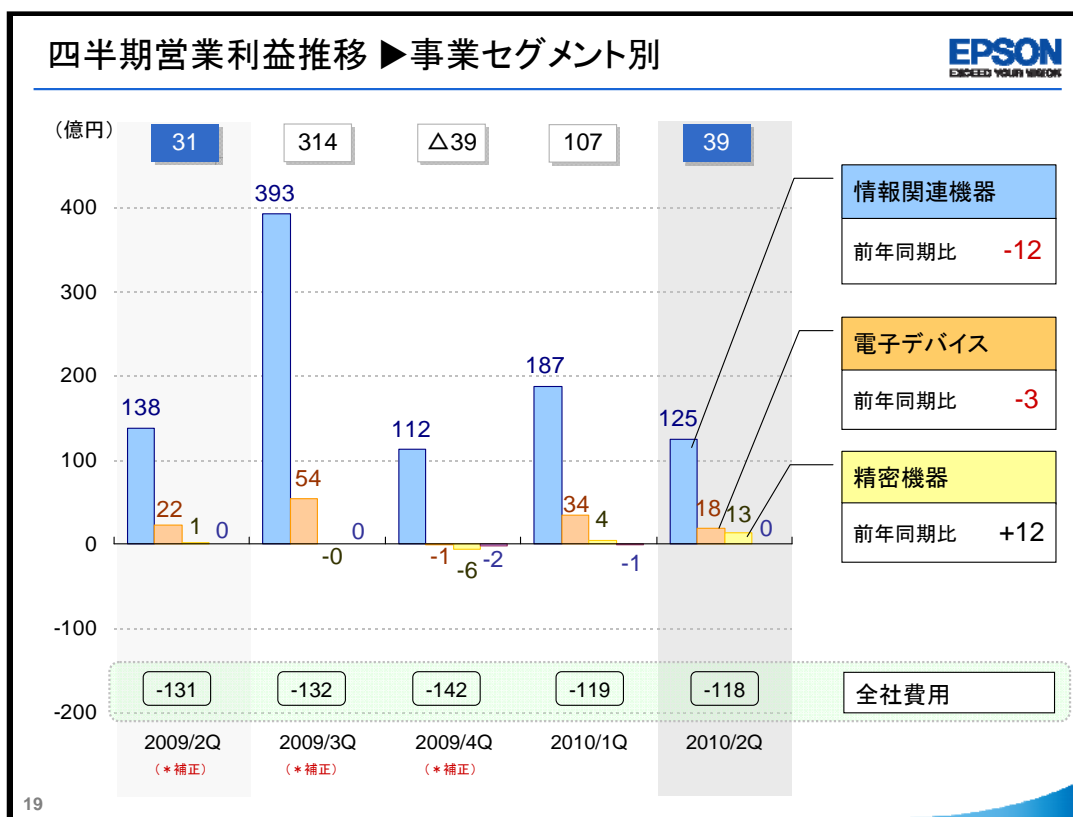
四半期販売費及び一般管理費推移



18

■販売費及び一般管理費の四半期推移

- 費用の効率的な執行につとめたことなどにより、前年同期と比較して、34億円の減少。



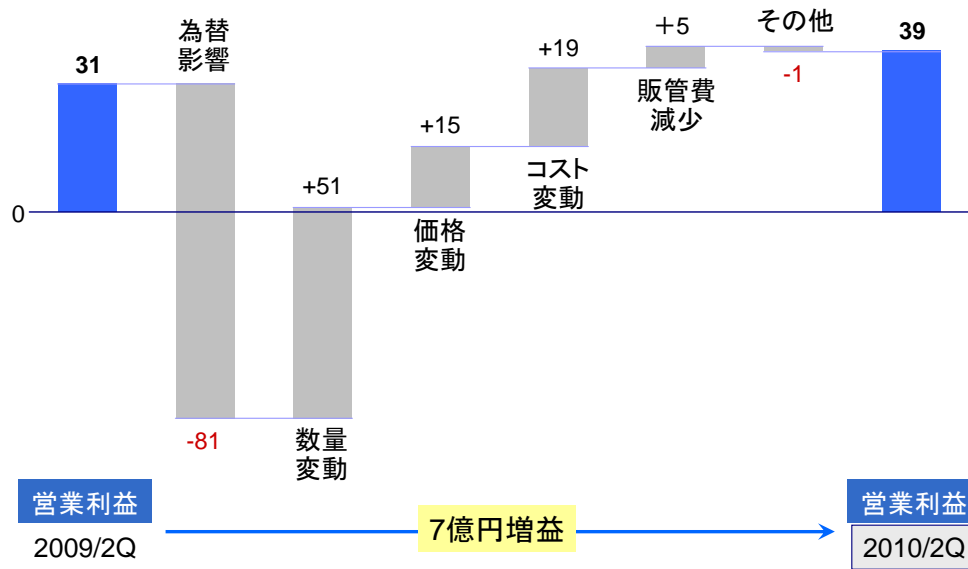
■ 事業セグメント別の四半期営業利益推移。

- 情報関連機器は、前年同期比 12億円減益の125億円。
プロジェクターやビジネスシステムは、増収による増益。インクジェットプリンターは、本体のプラットフォーム共通化によるコストダウンを進めたものの、年末商戦に向け第2四半期において前年を上回るボリュームの製造に着手したこと、ならびに為替の円高影響により減益。
- 電子デバイスは、前年並みの18億円。
半導体は、モデルミックスの改善によるASPの上昇や、コストダウンへの取り組みなどにより増益。水晶デバイスは、増収となったものの、円高による影響や、ASPの低下により減益。ディスプレイは減収で減益。
- 前回予想との比較について。
- 情報関連機器は、ビジネスシステムやインクジェットプリンター事業を中心に、変動費率の改善や事業全般におけるコストダウンの効果に加え、これから迎える本格的な商戦期におけるタイムリーでより効果的な販売促進施策の展開に向け、慎重な費用執行を継続したことなどにより前回予想を上回った。
- 電子デバイスは、半導体事業では、高稼働率を背景にコストダウンや固定費削減の成果があったものの、水晶デバイス事業での数量減による利益未達で、若干予想を下回った。

営業利益増減要因分析



(億円)



* 2009年度損益については、旧基準による損益を使用

■ 営業利益の前年同期比、増益額 7億円について要因を分解(参考)

- 2009年度 第2四半期の営業利益 31億円 に対し、為替影響により 81億円の減益要因があったが、需要の確実な取り込みや、収益改善への取り組み、モデルミックスの改善などにより、数量変動、コスト変動、価格変動などの増益要因でカバーし、当四半期営業利益は39億円。

貸借対照表主要項目推移

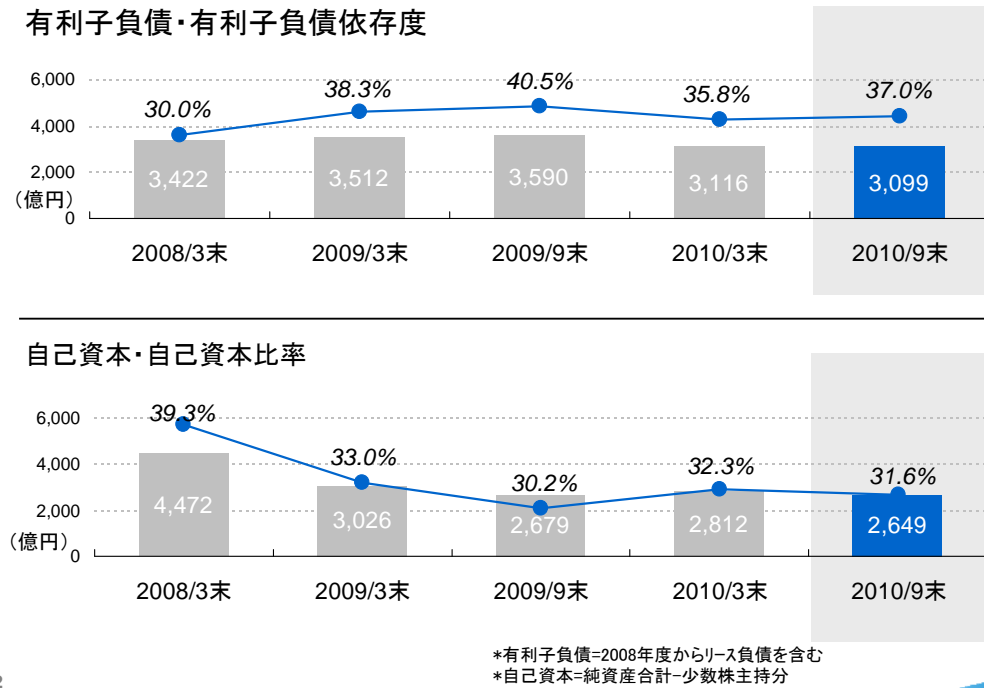


21

■ 貸借対照表の主要科目

- 総資産は、年末商戦に向け たな卸資産の増加はあったものの、現金および預金の減少や、設備投資の抑制による有形固定資産の減少などにより、320億円減少。

貸借対照表主要項目推移



■ 貸借対照表の主要科目

- 有利子負債は、9月に社債200億円の発行があったものの、借入れの返済を進めたことにより、前期末に比べて、17億円減少、総資産の有利子負債依存度は 37.0%。ネット有利子負債は、851億円。
- 自己資本は 163億円減少し、自己資本比率は31.6%。

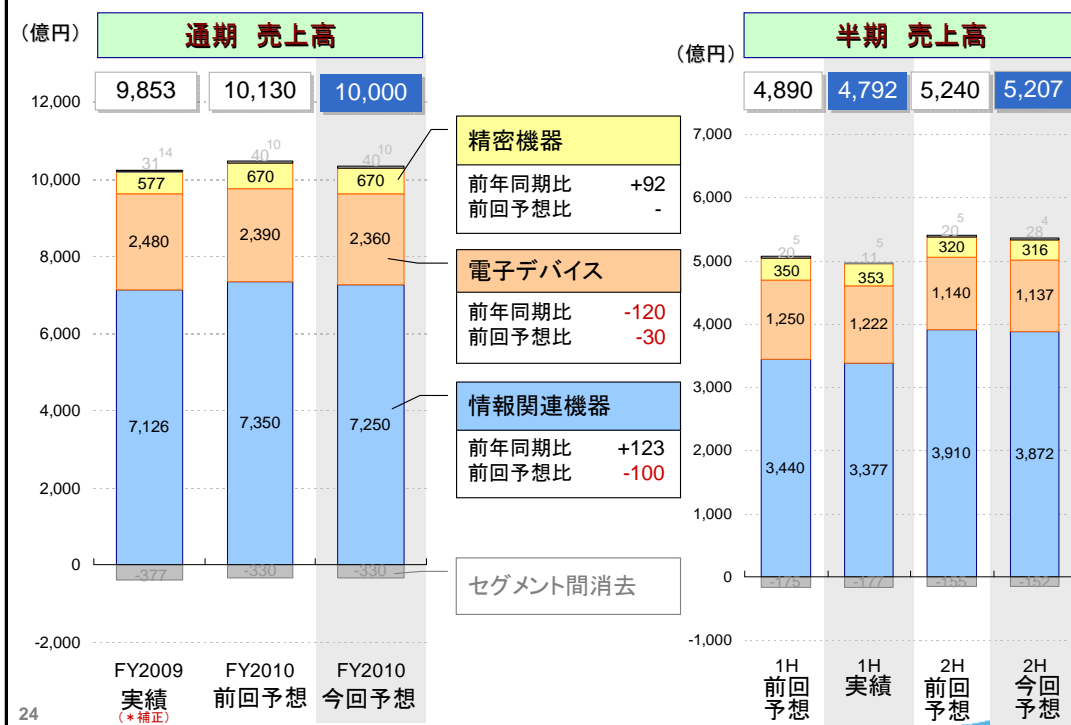
1) 2010年度 第2四半期決算

2) 2010年度 業績予想

23

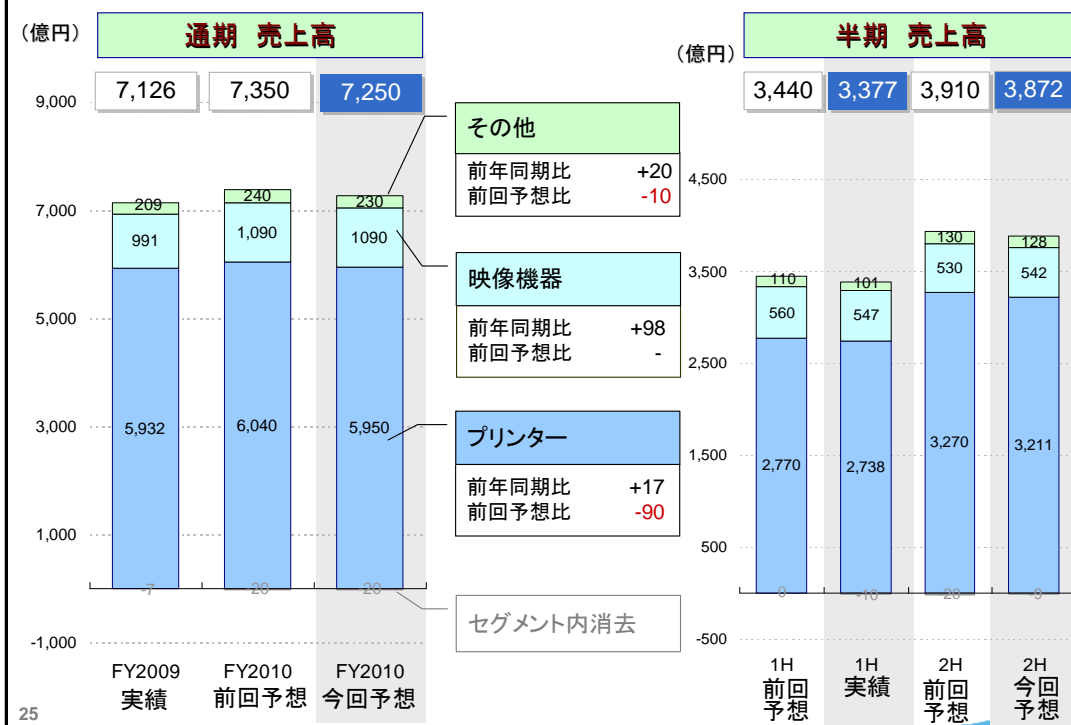
■2010年度の業績予想

2010年度業績予想(売上高)▶事業セグメント別



■事業セグメント別 売上高予想、上期 / 下期別の内訳

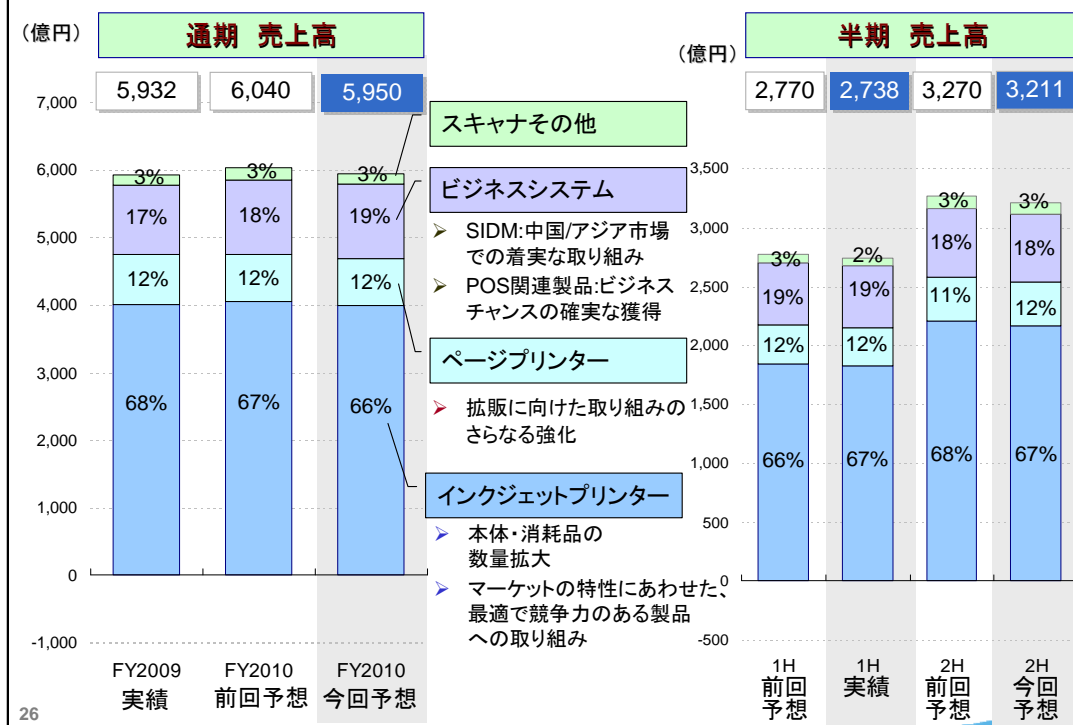
事業別売上高予想 ▶ 情報関連機器セグメント



■ 情報関連機器事業セグメントの事業部門別売上高の内訳

- 映像機器事業は、プロジェクター市場でのビジネスおよび教育向けにおいて、下期も引き続き堅調な需要が見込まれる。
売上高1,090億円達成に向け、充実した商品ラインアップで需要を取り込む。

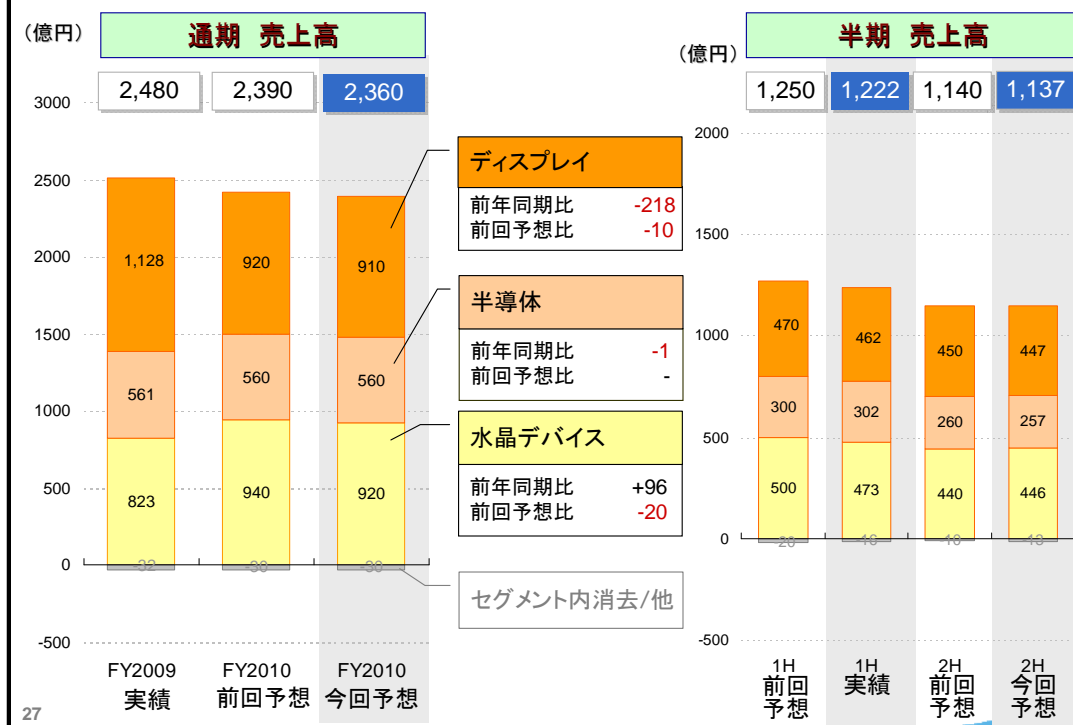
事業別売上高予想 ▶ プリンター事業



■ プリンター事業の製品別売上高の内訳

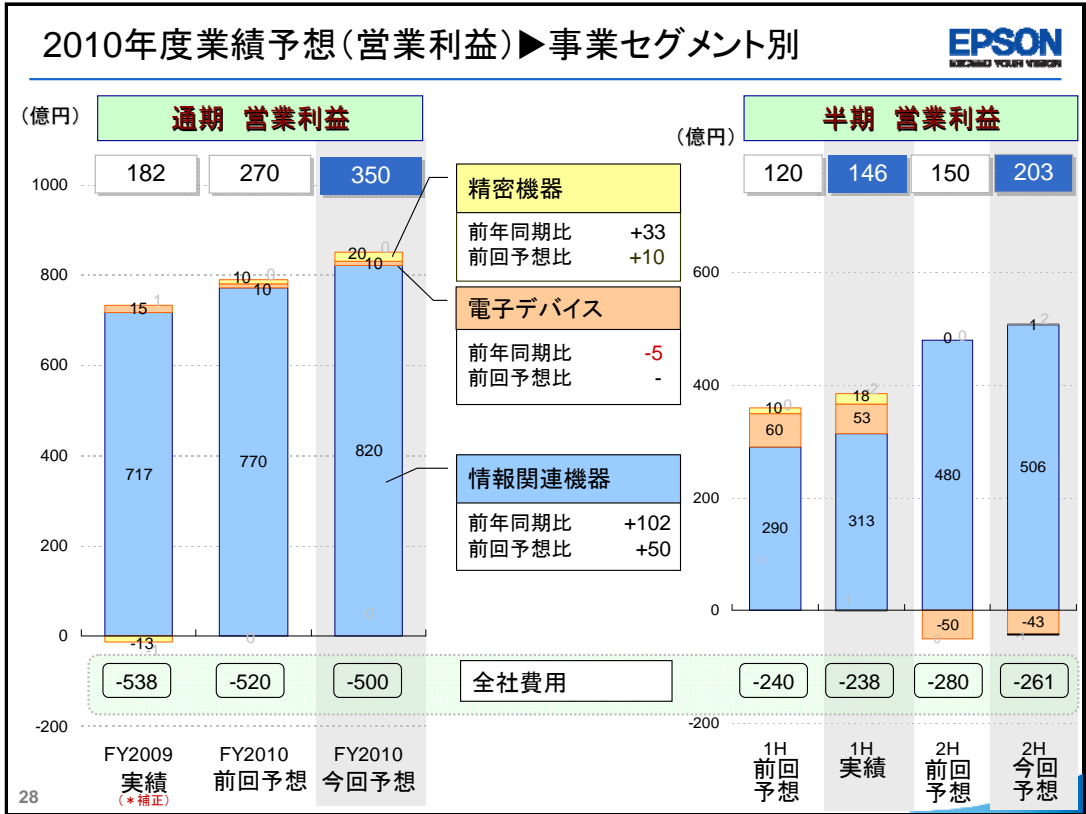
- USドルの為替前提変更に伴い、下期の売上高は前回予想を若干下回る。事業別、ならびに地域別の戦略前提に、大きな変更はない。

事業別売上高予想 ▶ 電子デバイスセグメント



■ 電子デバイス事業セグメントの事業部門別売上高の内訳

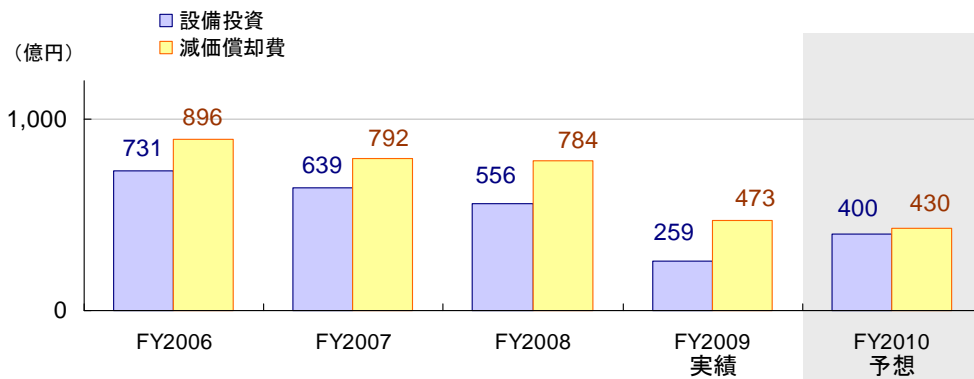
- 各事業とも、足下での需要にしっかりと対応、為替変動による影響を最小限に止め、下期は ほぼ前回予想並み。



■営業利益の事業セグメント別予想と、上期 / 下期別の内訳

- 情報関連機器は、ビジネス向け製品が堅調に推移、あわせて費用の効率的な執行を継続することにより、円高影響をカバーし、前回予想を上まわる見込み。
- 電子デバイスは、前回予想並み。
- 全社費用は、通期で20億円の改善。
- 研究開発費などは、今回の予想修正に再精査の結果を織り込み。

設備投資・減価償却費予想



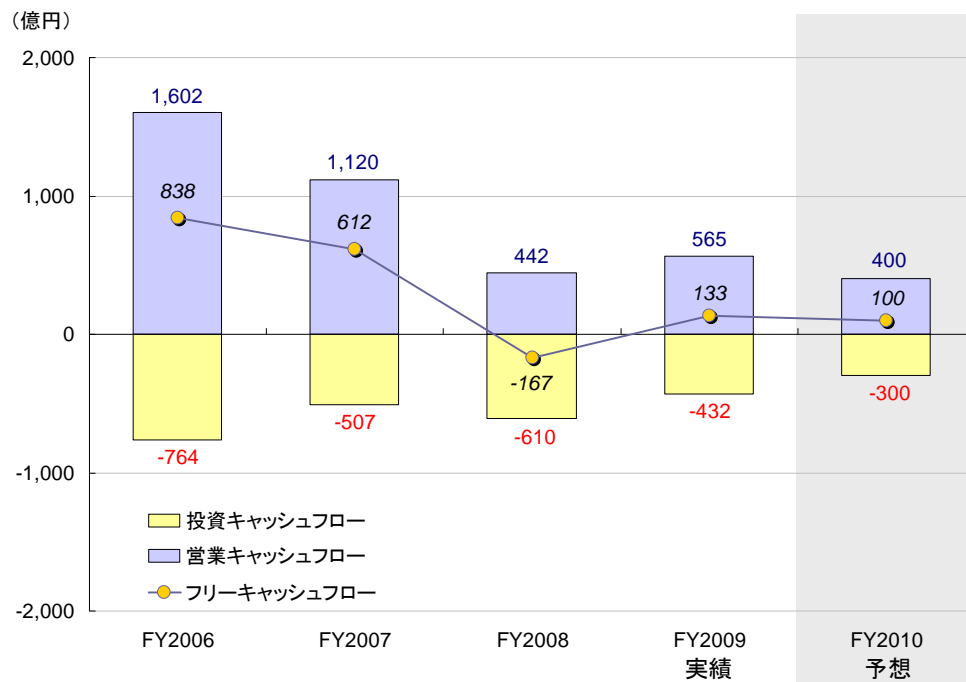
<セグメント別内訳>	FY2009実績		FY2010予想	
	設備投資	減価償却費	設備投資	減価償却費
情報関連機器	125	244	200	230
電子デバイス	98	104	130	100
精密機器	18	39	30	40
その他・全社費用	16	85	40	60

29

■設備投資と減価償却費

- 設備投資は 400億円、減価償却費は 430億円に見直し。

フリーキャッシュフロー予想

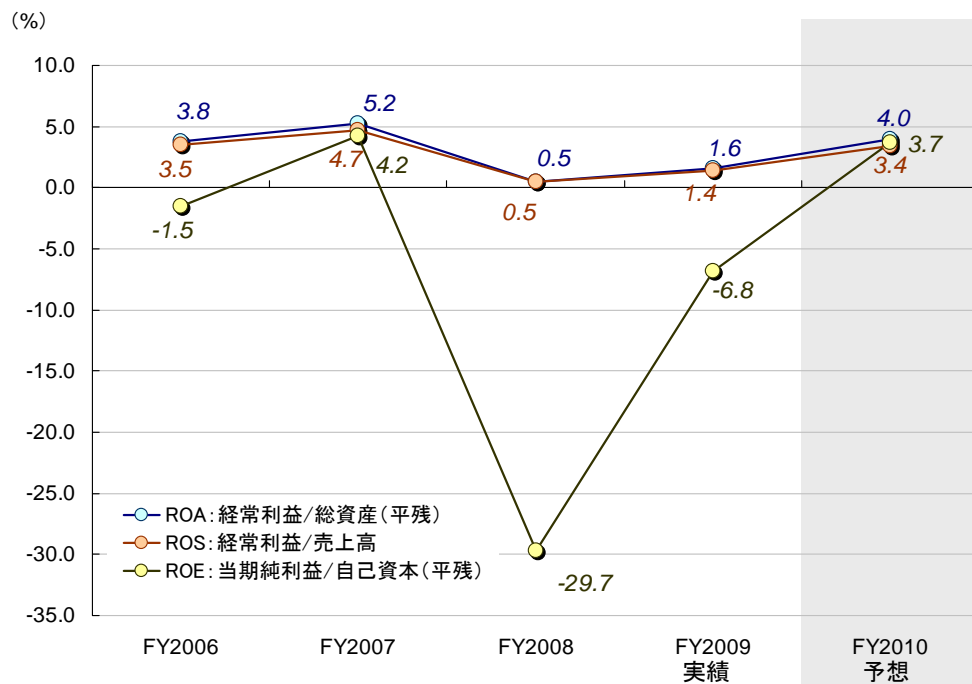


30

■キャッシュフロー

- フリーキャッシュフローの予想を100億円に見直し。

主な経営指標の推移



31

■ 主な経営指標

- ROSは 3.4 %、
- ROAは 4.0 %
- ROEは 3.7 %

EPSON
EXCEED YOUR VISION